推古佛如來立像一軀

矢代幸雄

推古佛は、純眞愛す可く、且つ高古なる氣品を有して、世の蒐集家の垂涎し措かざるところである。社會に強き欲求あれば、必ずその物は出て來る道理にて、世に推古佛と稱せられて流布するもの、總てを算へたならば、可成りの數に上るであらう。その謂ゆる推古佛がさまざまなる種類を含むで居ることは、言ふまでもない。推古佛と言へば、學者は先づ要愼してかゝらねばならぬといふ現狀に在る。

推古佛に對する要愼の原因は、その內に僞作が含まれ易い、といふ事情にばかり在るのではない。勿論、金屬の古藝術の僞作は、近時支那にも日本にも驚く可く巧妙になり、專門家と雖も屢々陷れられて鑑識を誤つたといふ挿話は、幾つも世間の談り草になつて居るほどである。技術的に素樸稚拙の域を出でない推古佛は、僞作を作るに、正にもつて來いの材料にて、鑑賞家にとつて、先づ以て此點よりの警戒を要するは勿論である。然しながら、それよりも學問的に興味ありまた研究の必要ある疑問は、謂ゆる推古佛中に大陸將來の金銅佛も見出さるゝと共に、また我國の推古以後諸時代に亙る製作も包含され、それ等にはまた地方的に作風の相違がある等、是等の諸問題に對して美術史的處理をしなければならないこと、これである。そのうちには一見して樣式上の差違を認め得るものもあれば、或はまた同じ推古形を守りながら製作が遲れたかと思はるゝものもあり、後者に關しては、推古樣式が我國に何時まで忠實に保持されたかといふ如き別の問題をも提起する。卽ち漠然と推古佛と總稱する金銅佛中には、性の良否、作の古き晩き、國別、地方別等、さまざまの問題を含むで居て、その攻究は複雜と言はざるを得ない。

是等の問題は、謂ゆる推古佛の總目錄（コルプス）を作り、全體を分類して初めて解し得ることで、現在は未だ用意が足りないのみならず、その比較材料たる推古佛の周圍の作品、卽ち大陸諸國の金銅佛の研究も、未だ充分信賴の置き得る程度には進步して居ないのである。特には日本金工史の佛敎彫刻の部は、香取秀眞氏等の專門史家の努力にも拘らず、遺品の比較的に多き推古白鳳を過ぎた後は、天平より平安

朝にかけて、卽ち日本彫刻史としては頗る有意義なる時代を通じて、唯だ部分的に多少の整理がついて居るのみで、謂ゆる推古佛中の異樣なるものを、この方面の知識より窮めんとするも、未だ甚だ出來難い狀況に在る。例へば、那智發掘の推古白鳳式の不可思議なる鍍金佛像の如き、尙ほ考へる可き問題を包むで居るかの如く思はれる。まして民間に散在する謂ゆる推古佛を見る時、大抵の場合は、その確固たる理解に於て、一抹の不安を伴ふを禁じ得ない場合が多い。是れ蓋し、一方に御物四十八體佛といふ明確なる一群が儼存するあり、それも詳しく見れば諸種の樣式的問題を包藏して居るけれども、日本かその直摹の模範である朝鮮か、或は推古かそれを承け繼いだ白鳳か、といふやうな謂はゞ極めて上層の疑問に過ぎざるに對して、他に散在する諸像に關しては、更に廣汎にして深入りしたる疑問を含みて、その美術史的輪廓に模糊として收まりのつかざる何物かを感ぜしむる故である。斯る間に在りて、玆に紹介せんとする樺山伯爵家に祕藏せらるゝ如來立像は、見るからに、推古的特質——と言つても當時將來の朝鮮佛とは未だ容易に區別のつきかねることを前提として——推古的特質を示し、直ちに淸楚なる感覺と無邪氣なる神祕性とを以て、心を打つものがある。是程に明快に推古式なるものは、民間に稀有と言はなければならぬ。圖版第七・第八參照

この像は總高九寸九分(三〇糎)、左右の手首を除くのほか、佛身臺座共鑄にして、內部は深く空洞になつて居り、而して鑄身は比較的に厚味が多い。手首は左右共に挿し込みにして、現在も動かすことが出來る。頭髮の部を除いて、佛身臺座共に鍍金せられ、その金色の落付いた美しさは、正に無類である。世に鍍金ある推古佛と言ふものは、最も普通には、やゝ赤味を帶びた黝むだ煤色に覆はれ、是は香煙に燻された爲めと解釋されるのである。而してこの煤がとれたところからは、非常に光つた金色が顯はれたりする。勿論、斯くの如き時代のよごれと手擦れの顯はれ方も可能であるに相異ないが、更に一段と高級なる古色は、渾然として全體に漲り、光るといふより微光に沈むだと言ひたいやうな、柔いだ金色である。この種の古金色は、四十八體佛に最も豐富に保たれて居る。樺山伯爵家の如來立像も、最も見事なる高貴の色と肌とを持つ。

像の製作は、單純を極めたものである。この著衣の皺襞を幅廣い平行線を次第に重ねて表はす樣式は、四十八體佛中に普通に見るところであるが、玆にはそれが一層原始的なる簡單と大やうとを以て行はれて居る。臺座を形作る反花の蓮華も花瓣を大きく取り、斯る場合に有り勝ちの細かい裝飾も彫りつけずに、如何にものびのびと作られた。特に長閑と言はうか暢氣と言はうか、世にも遠き古代の神祕感を示すものは、如來の面相であらう。兒童畫が示すやうな單純なる肉付けと線描的の彫りに依つて、佛の人の好さそうな表情、表情といふにはあまりに仄かなる象徵と、頰のあたりに謂ゆる「古式の微笑(アルカイック・スマイル)」が屯ろさせられてある。全體として些かの拘泥なく、鷹揚にして迫らざる風格は、超自然的なる佛性を示現して、幽玄なるものがある。

今この像を、四十八體佛其他の標準的なる推古佛と比較する時、それが藝術的に同一群に屬すること一目瞭然たるものがあるが、同時に、是れ程に單純素樸なる作風の他に見出し難きことも事實にて、之を如何に解釋してよいのであらうか。四十八體佛其他は、如何に簡單なる作風のものと雖も、例へば、面相の表出に於て、更に詳しき肉付と陰影の見方とがあり、樺山伯爵の像に見る如く、殆ど平滑なる前額部に、見開いた眼瞼を上下に線描にて一氣に鐫刻して現はすが如き原始性は、一個も見出すことは出來ない。四十八體佛は、如何にぼつとした古代味を持つて居やうとも、一種の鋭どさと雕琢の痕跡とを藏するに對して、この像の大まかなる作風と滑らかなる觸覺とは、その點だけ誇張して言へば、或る對照をなすかにすら考へられる。そこで此像は何處で作られたかの問題が起るのであるが、この謎は容易に解き難い。四十八體佛のうちにも或る程度まで朝鮮將來の像は豫想される筈であるが、一方に、現在に遺存する朝鮮金銅佛は、新羅統一時代以後のもの多くして、それ以前の、最も我が推古時代の造像に關係ある三國時代の作品は極めて乏しく、是等の特色を捕へて之を我國の推古佛と比較するには、材料が不足し過ぎて居る。樺山伯爵家の像は、その原始的なる作風、すべすべした感觸、何處か捕へどころのないやうな異國的神祕性を以て、或は朝鮮將來を思はせないではない。但し未だ朝鮮の遺物中に明瞭に近似の例證を指摘し得ないので、確信ある結論を出すことは躊躇される。

最後に、この像は何佛を表はしたか。如來像にして之と同じ印相を爲すもの、推古時代に最も多く、銘文によつて何佛たるを明瞭に知るところの法隆寺金堂の釋迦、藥師、綱封藏の釋迦、何れも坐像ながら同じ印相に住して居る。卽ちこの兩手の位置は推古時代の如來佛に共通して最も普通に行はれたところにして、更に支那六朝佛の例を檢すれば、釋迦及び彌勒は最も頻繁に此の姿勢をなして居る。是等の大多數の例に從へば、樺山伯爵家の像を釋迦如來と解して、殆ど誤なきものの如くである。然しながら同時にまた他の佛體とも共通し得たことは慥かであるから、銘文なき以上、嚴格に之を釋迦と決定するわけには行かない。

この像と類似の形式を備へたる如來立像は四十八體佛中に四軀含まれて居るうち、特に一軀は殆ど同じ形像をなす。(註一)但し臺座蓮瓣の比例だけは聊か異なつて居る。尙ほ、奈良玉井久次郎氏所藏品中に、樺山伯爵家の像と、形式大さ共に相同じといふも過言に非ざる一體がある。(註二)唯だ多少異るところは顏面の取扱に見られる。卽ち曩に樺山伯爵家像の面相に就いて述べた如き珍らしき原始的描出は、玉井氏の像に見ざるところにして、その顏は推古佛に最も普通に見る如く、上瞼を少しく突出したる肉付けを形作り、眉より眼にかけて陰影を投げかけたる聰明なる表情をなして居る。

註一、法隆寺大鏡第九册第二四・二五圖。

註二、天寶留眞・第一〇—一一圖・推古朝金銅阿彌陀立像とあるもの。

藏氏輔愛山樺　爵伯　京東

像　來　如